

養育里親

～もうひとつの家族～

15

坂口 伊都

はじめに

里親としての生活も1年以上が経ちました。やっとなんかというところでしょうか。この子との生活リズムができ始め、お互いの短所と長所を知りあいながら、喧嘩をしても引き際がわかるようになった気がします。一緒に生活することが当たり前になり、何かをする時には必ずこの子の存在を考えます。ただ、私は数に弱い人間で、全員で5人前だとわかっているつもりが、夫が会議、兄の帰りが遅くなる2つの引き算をすると、何故か2人前と勘違いしてしまっています。こんな4から引く癖が抜けないでいる間が抜けた里親ですが、支援側の方や里親会から、どのような里親支援があるといいと思いますか？と質問を受けます。ここまで必死になって生活して

きましたが、少し余裕が出てきたので、どのような里親支援があると助かるのだろうかと考えてみたいと思います。

実際に体験してみて、どのような状態のスタートでも、里子を家族として迎えるとなると生活事態に変えざるを得ない部分が出てきます。それは、波紋のように思わぬ所まで届いていきました。里子と里親の関係に注目することも大切ですが、里親家庭の周辺環境にも配慮があるので感じています。

里親の最大の特徴は、家族の中に子どもを引き受けることにあると思います。仕事として割り切れるわけでも、プライベートと言い切れるわけでもない環境に難しさを感じています。一端、この生活が始まればレスパイト制度はありますが、基本はコツコツと新しい生活を過ごしていくことにエネルギーを費やします。里親と

しての私を切り離すことがない日々となります。この感覚は、里親特有のものだからこそ、整理が要るのでしょうか。今回から、里親支援について私なりに考えていきたいと思います。

まずは、里子との関係を作るための情報が基本となります。次は、里子が揺さぶってくる行為に里親自身が自分を見失わないようにしていく工夫が要ると思います。子どもの問題行動を目の当たりにして、親が冷静でいられることの意味は大きく、親の構え方や捉え方で子どもに対するストレスが増えたり減ったりすることはどの親子関係でもあることです。今まで暮らしたことがない里子と生活を共にするだけでお互いにそれ相応のストレスがかかります。里親がこんなに頑張っているのに里子は何故その行為に伝えてくれないのかと苛立ちやすくなります。里親自身が自分の状態を把握しないと里子との関係性を悪化させるリスクが高まります。その他、里子加わることで起きる家族の変化、変化は家族を超えて親戚関係にも及びます。実際に里親との暮らしを整えていくために学校や地域との関係調整も必要になってきます。項目に直すと以下のようなになるでしょうか。

- ① 里子の生い立ち・背景を知る
- ② 里子の強み、弱みを知る
- ③ 里親自身の得意、不得意を知る
- ④ 里親家族のバランスを知る
- ⑤ 里親家族の周辺への働きかけ
- ⑥ 行政、地域への働きかけ
- ⑦ 何を目標にするか考える

最後の⑦は、里親が子どもと暮らしていくうえで、悪循環に陥らないための手段になります。的確で具体的な目標（今、目指すもの）を内に抱いていると、気持ちの揺れ幅が小さくて済むようになりました。

今回は、①と②の項目について書いていき

たいと思います。どうぞ、最後までおつき合ってください。

里子の生い立ち・背景を知る

里子との暮らしは、マッチング期間があるとはいえ、2歳なら2年間の10歳なら10年間のこの子の生き様があります。その間の子どもの育ちは、目の前の子どもと接していても全く見えませんし、今までの積み重ねが今のこの子を作っています。生い立ちがブラックホールのように抜け落ちている現実があります。

里親委託になるために、いつから外出、外泊にし、里親以外の家族とどのような手順を踏んで出会っていくのか、転入のための手続きや生活に必要なものを揃えていくための準備をしていきます。その中で、この子がどのような背景で社会的養護の場になったのかという概要説明は受けませんが、その時にこの子がどのような行動に出たのか、この子の感情はどうだったのかと考え話し合う機会が持っているとはいえないかと思います。児童相談所のワーカーも児童養護施設の職員も担当が変わるとそれ以前のこの子の様子を見ていないため、記録等の引継ぎの中では実感が持てず、それを里親に伝えること自体が難しいこととなります。それでも記録を振り返り、この子の節目となる出来事は何かあったのかを里親も児童相談所のワーカーも里親支援専門相談員も知ろうとすることが大事ではないでしょうか。子どもの立場で考えて見る作業をし、共通理解しておく、里子の今出している行動の意味も考えやすくなると感じます。

記録を振り返る中で、この子がどのような環境にどれぐらい身を置いてきたか、安心して頼

れる大人とどのように向き合っただけでこられたかを知りたいと何回も感じました。具体的には、在宅期間中、この子の世話をしていたのは誰で、どのような接し方をしてきたのか。乳児院、児童養護施設等の措置変更や担当職員の変更ほどの程度あったのか。担当職員が、この子にとってどのような存在に映っていたと思うのか。自分を養育してくれる主たる大人が、変わっていくものだと子どもが感じていたら、里親に心を開こうとしないでしょ。さらに、大人を頼っても仕方がないと感じているようなら、その先に大人に不信感を抱いていないかどうか考えてみる必要があります。大人不信を抱いていたら、里親に気安く心を許そうとはしない行動に出やすくなりますから、それによって里親不調に陥る可能性があるというのを知り、また養育者が変わらないためにも、この子が感じている大人像を予測してみる作業は有効なのではないかと思えます。

私自身も里子と暮らし始めて、この子にとって生活を共にする大人と子ども像に独特なものを感じました。大人よりも子ども（兄弟）と調和しようとし、大人と子どもの間にわけ隔ての壁があるようでした。また、里父と里母との対応の違いがあり、男性には一目置く、女性には順位争いを挑んでいるような感じを受けました。我が家だけではなく、他の里親宅でも里父の言うことは聞いても、里母の言うことを聞かないという話は、よく耳にします。この家では、里父と里母が家を切り盛りする人で、どちらか一方に取り入っても何とかならないことを知り、この二人と繰り返し話し合いをしていく中で変化してきたように感じます。

その他、この子が暴力、暴言を受けた経験について知っておくことが重要になると思えます。暴力を受けた子は、自分でも暴力をふるってしまうということがあります。暴力を周りの人にふるうのは、里親としても困ってしまう事象で

す。乱暴な子とと思っている間は困った子でしかありませんが、暴力を受けていた事実を知ると、この子の辛い過去に触れることになり、子どもを悪者として扱わなくなります。子どものせいにならなくても済むことは、里親には大きな支えになると思えます。誰からどのような暴言、暴力を受け、その時助けてくれる人はいたのか、どう耐えてきたのかを知り想像してみると、この子が人間不信に陥っているかどうか想像することができます。子どものしんどくて辛い経験をした上で出ている行動であれば、それは簡単に変わるものではなく、時間をかけて忍耐強くつきあっていくものだと里親が感じることができると思えます。それは、周りから伝えられるだけではなく、あくまで里親自身が気づいていく作業が必要なのではないかと思えます。

子どもが里親委託という新しい環境に身を置くことの戸惑いを感じる必要もあると思えますし、新しい生活の中で何を配慮すべきかも見えてきます。

多くの里親は、少しでも子どもの支えになる人になりたいという気持ちを胸に秘めています。その強い思いが、里子との関係を悪化させる場合があると感じます。子どもが、大人に対して心を開いていくまでには時間がかかります。その中には、試し行動と言われ、里親の手に余る行動を示し、困ったり不安になったりします。里親の思いと里子の行動が伴わない状態です。言い換えれば、里子は真っ直ぐ甘える行動を出せずに、怒られるような行為を繰り返してしまい、里親側は里子に拒否されているように感じ落胆する。そこを冷静に対処していくための策として、里子の背景や生い立ちを知っておくべきでしょう。

この子を支えていく大人達が、肩を並べてこの子のことを語りあい、気持ちを考えて見ようとする試みには意味があると思えます。また後の真実告知やライフストーリーワークにもつな

がっていく事柄にもなります。

我が家では、10歳で委託されているので、私達はあなたの産みの親ではないという真実告知の必要はありませんが、自立するまでにライフストーリーワークを実施しようと考えています。一般的に思春期に入る前の方がいいと言われますが、我が家の場合、まだする段階ではないように感じています。家族というものが何なのかを知り始めている段階で、家族としての基盤作りをもう少し積み重ねる時期ではないかと判断しています。ただ、その積み重ねる時間の分だけこの子は年を取り、思春期真っ盛りに突入してしまうという不安も同時に感じています。この子が生き続けるために生い立ちのどの部分をどのように知っていくのがいいのだろうと考え始めています。この部分も相談できる方が支援側にいて欲しいです。

真実告知について感じている部分としては、まず里親自身が血の繋がりがない親子関係をどのように見ているのかを考えてみた方がいいのではないのでしょうか。無意識に血の繋がりがないことに罪悪感や劣等感があるのだとすれば、それは里子にとって不幸なことです。そこに里子が恥を感じる必要はないですし、里親がきちんと大切な存在であることを伝え続けることが重要だと思います。その土台を固めて、真実告知を捉えていく方が、賢明なやり方になるのではないのでしょうか。確かにそんなに簡単な問題ではありませんが、まず里親自身が解放されないと、子どもは救われないのだろうと感じます。



里子の強み、弱みを知る

ここについては、初期の段階だけではなく常に意識しておく必要があると感じています。里親をしていると、いけないことばかりするので怒ってばかりになってしまう、もっとやさしく接した方がいいとは思いますが、上手くいかないという声をよく耳にしますし、私自身も同じように負のスパイラルを抱え、落ち込んできました。里親の強みは、この子と24時間向き合えることです。向き合わなければならないから、しんどくもなるのですが、じっくりとこの子を観察し、作戦を練り、実践して、この子がどう反応するのかを追うことができます。

我が家の里子を見ていると、何か自分がやらかしてしまった時、それを指摘する大人に対して話題を変えようとしたり、「知らん」と言ってその場を終わらせようとする印象を持ちました。里親宅では、その問題に一定程度の決着をつけないと気まずい空気が次の日も続きます。怒られる内容の多くは、してはいけないと言われてしていることをしているので、里父も味方になってくれません。里父は、どうしたらいいのという促しをしながら、この家族の不穏な空気を早く終わらせようという気持ちも同時にこの子に伝えているのでしょうか。里子は、気持ちを立て直してから「謝りに来た」と、私の所にやってきます。その言い方も下手をすると謝りに来てやったという上から目線にも聞こえますが、精一杯の表現なのだと思います。そう思うことができるのは、日々のこの子の言葉使いを観察し、上手く表現することが苦手だったり、使う言葉が汚かったり、言葉そのものを知らないと感じているところからです。そこで、この子が偉そうな態度で謝りに来たと判断してしまうと、また悪循環が起きますし、二度と謝ろうとはし

なくなるでしょう。この子をよく知ろうとすることで、里親の態度にも変化が生まれます。せっかく生活を共にするのですから、気持ちのいい循環を作っていきたいですし、それに近づける方法を知る方がいいと思っています。

まず、里親委託初期の段階では、里子が送ってきた生活スタイルを具体的に知ることが大事だと思います。当たり前と思っている事柄が、聞いてみると我が家のやり方とは全然違ったということが多くあります。どの家庭でも、その家庭の特徴がありますし、施設実習があるとはいえ、施設の生活は想像できにくいと感じます。あえて細かい日常に目を向けると、日常生活の中で意識しなくてもできることと逆にできて当たり前と思っていたことがあまり経験していないことがわかります。

例えば、我が家では、なかなか里母の言うことが聞けないのですが、食事の後の食器を片付けることは、施設で毎日していたので、食器を片付けてねと声掛けをすると自然に身体が動きます。習慣として身についたことをするのは、それほど抵抗を感じないものようです。当たり前と思っていたことでは、幼児の子が里親家庭での初めての入浴時間に、大泣きされたという話を聞きました。理由は、施設職員はいつも服を着たまま入浴させていたので、里母が裸になったことに驚いたそうです。

その他、小さい頃からどのように寝ていたのか、寝つきはいいのか悪いのか、寝起きはいいのか悪いのか、入浴は誰と入っていたのか、身体の洗い方はどうしているのか、何時頃が入浴時間なのか、食事の雰囲気はどんな感じで、何が嫌いで何が好きなのか等、日常生活の場面を教えてもらいながら、自分たちの生活スタイルとの違いを知る。お互いに当たり前と思っていることが、当たり前でないとわかることは、この子の戸惑いを察知できることにつながります。子どもの戸惑いを察知できると、子どもに過大

な期待をしなくて済みます。

以前に連れ子に対して、継父が面倒をみてあげるのだから子どもの方も遠慮して当たり前と言う方がいました。子どもは器用に言葉や行動を操れませんから、その子は何かを言われると固まったり、暴れたりしていました。継父も戸惑っていたのですが、子どもの方が弱者ですから傷つきも深くなります。子どもとは、無邪気で可愛気があって、素直に甘えてくるものだと思ってしまうと、この子自身が見えなくなってしまい、親も子も苦しくなってしまいます。大人に対してまっすぐにいろいろな気持ちを出せるのであれば、子どもも戸惑ったりせず、生きやすくなるでしょう。

我が家では、これまでも繰り返し話題にしていますが「言葉の使い方」で苦労しています。この子は、どのような言葉を使って成長してきたのでしょうか。ある時期から言葉使いが変わったのか、どのような言葉のやりとりをしているのだろうかという想像してみますが、よくわかりません。言葉の中でも特に気になっているのは、「はい」という返事が出てこないことです。これは、小さい頃から教えられることなので、この子も当然知っている事柄ですし、小さい頃はしていたのではないかと思います。小学校の中学年ぐらいになると、子ども同士の影響を受けやすくなりますから、はいと返事することはカッコ悪いと思っているかもしれませんが、要領がいい子であれば、大人の前ではやり過ごすために返事をするでしょう。この子は、療育手帳を所持しているので、場面によっての使い分けが苦手なのかもしれません。

場面の使い分けができると、この子の強みにより際立ってきます。例えば、私が掃除機を持つとこの子はお手伝いをしようとフローリング用のワイパーを持ち、床の拭き掃除をしてくれようと準備します。それは有り難いのですが、掃除機を持った瞬間、真後ろに立つので、掃除

機をある程度かけてからしてくれるかなとお願いすると、「じゃあ、もうしない」と言ってワイパーを置いて 2 階に行ってしまいます。してくれないのか、まあいいやと思って掃除機をかけていると、いつの間にか降りてきて、黙々とワイパーをかけ始めています。えっ、する気満々だったのかと、その時にやっとわかります。ここで、「はい」や「わかった」と返事をすれば、なんていい子なのと思えるのですよね。言葉が違うだけで、これ程までに印象が変わるのかと驚きます。改めて言葉の大切さを感じます。この前も、クリスマスケーキを注文しようかどうかとカタログを見ている時、どれがいい？という話題になると、娘は「これがいいな」と言うのですが、里子は「これでいいわ」と言います。そこは、「で」じゃなくて「が」だよと伝えました。

人とコミュニケーションを取っていく上では、言葉は必要不可欠です。いいところがいっぱいあるこの子の行動も、言葉の使い方一つで台無しになってしまいます。里子だけに限らず、子どもの強みと弱みを観察する際に「言葉の使い方」を注目すると、子どもの特性が見えやすくなると思います。ほとんど喋らない子でも、どのような表情や行動で自分の気持ちを表現しているか観察すると、見えてくるものがありますし、その上でどのような関わり方をしていけばいいか考えることができます。

我が家ではその他にどう寝かしつけをしていけばいいか困っていました。もともと寝つきがいい子ではないようで、眠気がくるまでに時間がかかり、眠気がくるとコテッと寝てしまうタイプようです。しばらくは、一人で寝るのを嫌がって、父母の寝室で寝ていました。寝つきがいい子なら、電気をつけたままにしているでも寝てしまいますが、この子は寝るまでの準備があるので、部屋の電気を消し、刺激をなくさないと眠気がきません。それに付き合おうとする

と、添い寝ではなく、同じ部屋にいただけなのですが、何もできずに親にとっては辛抱の時間でした。

それがあつ時、あまりいい流れではないのですが、犬を無理やり抱かないという約束を破ったので、約束通り自分の部屋で寝ることになりました。その時は、この子の横につくこともやめ、豆球の明かりにしてほっておきました。すると、あれ程一人で寝るのを嫌がっていましたが、意外にすんなりと一人で寝られました。それからは、寝室で寝ていた時のように早く寝なさいと言われて、自分の部屋だと自分のペースで寝られるということを感じたようで、このまま自分の部屋で寝ると言い出しました。怪我の功名でしょうか。本人は得した気分になっていますが、寝室で寝ても、自分の部屋で寝ても、だいたい寝入る時間まで 1 時間弱かかっていたので、寝付く時間は同じなんですけどね。自分でできたと思えることは大事なので、様子を見ています。ただ、真っすぐ甘えられないために、寝付けないといって里親の寝室に助けを求めには来られないと思うので、その時はどう気づき、対処できるか気になっているところです。

一緒に生活を始めた頃は、咳をしている時におでこで熱を測ろうとしても触らせてくれませんでした。どんなにしんどくても、何事もなにかのように振舞っていましたが、一緒に生活をするようになって 1 年経つと、ここが痛い、怪我したと見せてくれるように変わってきました。弱みが強みに変わりつつあるのでしょうか。

私は対人援助の仕事をしているので観察し、行動の意味を考えることが習慣になっていますが、一般的には、そのようなものの考え方はしないと思うので、この子の行動について考え、整理をする人がいてくれると里親は助かるのではないのでしょうか。

終わりに

今回は、里親を実際にしてみて、里親支援に何があったら、里親子が暮らしやすくなるのかを考えてみました。その中でも、まず里子をどのように見ていくといいのかという部分を考えてきました。日々の行動にばかり気を取られると、肝心な部分が見えなくなるような気がしています。お互いに歩みよりたいのに、傷つけあってしまうのは、悲しいことです。私も毎日やさしく微笑んでいる里母でありたいのですが、私の性格も相まって、女神のような頬笑みにはならず、ゴリラのように唸ってしまっています。その度に自己嫌悪に落ち込み、子どもを育てるなんて私にできるのかしらと思っていた第一子妊娠期を思い出します。もしかして、力量もないのに大それたことをしてしまっているのではないか。そんな不安を抱えてはいますが、ふとした時に見せるこの子の笑顔に出会うと、この子にとってこの家はそれほど悪くないのかなと感じます。

次回は、里親自身に焦点をあてて、何が支援としてあると助かるのかを考えていきたいと思っています。

